

経営情報学会第16回学生研究論文発表会の開催報告

関西支部運営委員 横田明紀 (よこた あきのり)
立命館大学経営学部

1. 概要

毎年恒例となりました学生論文発表会を関西支部の運営により2021年2月27日(土)に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催いたしました。この発表会は経営情報関連の研究を行っている学部、修士・博士前期課程、ならびに博士・博士後期課程を卒業または修了予定の学生に卒業論文、修士論文、博士論文での研究成果を発表する機会を与え、質疑応答を通じてよりよい研究へと発展させるための一助とし、さらに、経営情報関連分野の研究・教育の進展に資することを目的に、2005年度より年度末に開催しております。ただし、本年度は緊急事態宣言が発令されたコロナ禍での開催となったこともあり、対面形式ではなくオンライン(Zoom ミーティング)によって行いました。

2. 発表会について

今回は卒業論文7件、修士論文5件、博士論文1件の推薦を受けましたが、修士論文1件が取り下げとなった為、計12件の報告が行われました。それぞれの発表者とタイトルは次のとおりです。

発表者の氏名とタイトル

卒業論文の部 (7件)

原田凌汰 (東洋大学経営学部) アジャイルソフトウェア開発におけるプラクティス構成要素の関係分析
稲垣寛人 (金沢工業大学情報フロンティア学部) 日本プロ野球における戦術的行動を反映した D'Esopo-Lefkowitz モデルの改良
高橋耕平 (岩手県立大学ソフトウェア情報学部) Network Embedding による店舗でのパン類商品の潜在売上予測
播磨宏哉 (静岡理科大学情報学部) アイトラッキングとログ情報を用いた Web ページ改善手法の提案

檜物大輝 (早稲田大学創造理工学部) マルチエージェントシミュレーションによる社会的インパクト投資の分析
大石将平 (東京理科大学経営学部) イノベーションを生み出す博物館の特性に関する実証研究
石田 爽 (大阪府立大学現代システム科学域) 芸能プロダクションによるアーティストの CD 販売戦略に関する一考察

修士論文の部 (4件)

石丸悠太郎 (大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科) 小売業における顧客の店舗内移動と購買履歴データに基づく店舗内回遊モデルの構築
CHEN, Dali (立命館大学大学院テクノロジーマネジメント研究科) 中国におけるオンライン教育サービスの受容要因に関する研究
佐々木誠治 (岩手県立大学大学院ソフトウェア情報学研究科) 商業施設における波及効果を考慮したテナントミックスの分析: 来店回数予測モデルと波及効果シミュレーションに基づいた分析手法の提案
茂木雅祥 (早稲田大学大学院商学研究科) トピックモデルを利用したウェブサイトのセグメンテーション手法の提案: 食意識に注目して

博士論文の部 (1件)

家入祐也 (早稲田大学大学院創造理工学研究科) 感性情報に着目した人の行動分析に基づく地域マネジメント
--

1人あたりの報告時間を卒業論文は発表10分・質疑5分、修士論文は発表15分・質疑10分、博士論文は発表20分・質疑10分と定め、研究内容についてのプレゼンテーションと活発な質疑応答が行われました(写真1,2)。また、各発表者からは事前にそれぞれの論文での研究内容をまとめた予稿を4ページで作成していただき、それらをまとめた発表論文要旨集の発行も行いました。

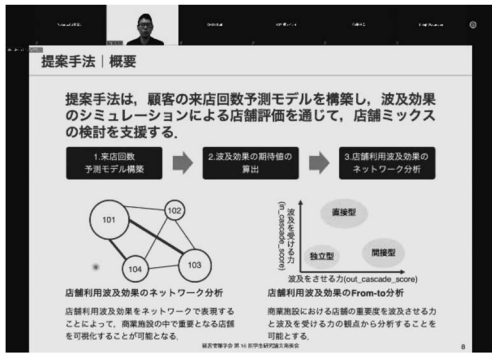


写真1 発表の様子



写真2 質疑の様子

3. 表彰式について

すべての発表が終了後、関西支部運営委員のメンバーで構成する審査委員会によって、各発表者の予稿、発表および質疑の内容を審査し、最優秀賞、優秀賞、および奨励賞を決定しました。各賞の受賞者は次のとおりです。

■最優秀賞

佐々木誠治さん（岩手県立大学大学院ソフトウェア情報学研究科）

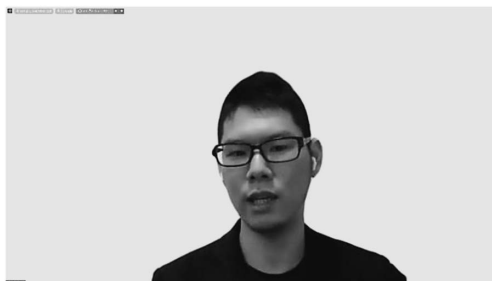


写真3 最優秀賞受賞者の佐々木誠治さん

■優秀賞

大石将平さん（東京理科大学経営学部）



写真4 優秀賞受賞者の大石将平さん

■奨励賞

家入祐也さん（早稲田大学大学院創造理工学研究所）



写真5 奨励賞受賞者の家入祐也さん

また、他の発表をいただいたすべての学生に対し論文賞が授与されました。

4. おわりに

最後に福井誠関西支部長より、Zoomでの遠隔実施であったがスムーズに進行できたことについて、すべての参加者の協力に対する謝意が表された後、本日の発表全体に関して次のように講評が述べられました。

- ・ 今日、発表いただいた学生の皆さんにとっては最後の学生生活がコロナ禍となり、大変に厳しい研究環境のなかで素晴らしい報告をいただいたことに敬意を表したい。
- ・ 学生研究論文発表会も回を重ねるごとに研究の水準は上がってきているが、本年度は学部生の発表が大変充実していた。

・ただし、最近では研究に対して手軽に使える手段や方法が増えてきている一方で、その使い方を一歩誤ると単に「やってみた」というようなことだけに陥る危険性がある。各自が得た結果に対して『どのような社会的インプリケーションがあるのか』を十分に考えながら研究に取り組んでいただきたい。

冒頭の「1. 概要」でも述べたとおり、コロナ禍ということで本発表会も初めてオンラインでの開催となりましたが、他方でそのオンラインの最大の長所ともいえるべく、本年度は近畿周辺のみならず大変広範囲の地域から多数の発表および参加をいただきました。Zoomのレポートによる参加者数では合計で63名（重複IDを除く）となっております。4時間半を超える長時間の発表会となりましたが、最後まで参加いただきました皆さま、ありがとうございました（写真6）。



写真6 参加者のスクリーンショット

本発表会は経営情報学会の研究活動の一環として実施しており、次年度も引き続き学生研究論文発表会を開催予定です。次年度も全国より多数の発表および参加のお申し込みがあることを期待しております。